

くろぐみだより

第11号 平成25年10月11日

10月になったというのに、暑いですね。10月10日、運動会前々日に、この文章を書き始めています。そう、もう、いよいよ、運動会。今年も、去年同様、「あさひこ秋祭り」をテーマに運動会を開催します。楽しみです。

運動会を前にして、今日も各学年、いろいろな姿を見せています。

年少さんは、今日も実に楽しそうに、お部屋の中に設置された玉入れのカゴにクラスカラーの玉を投げ入れていました。年少さんは、先生や友達と体を動かして遊ぶのがとっても楽しくなってきて、いつもニコニコ楽しそうです。

年中さんは、花園グラウンドに出向き、最後のかけっこ練習をしていました。

「いちばんになりたい！」とフライング気味に全カスタートで駆け出す子。とにかく思いっきり走るのが気持ちいい子。ニコニコ笑顔で最後まで走る子。

それぞれひとりひとりみんな違う、自分なりの「こうしたい！」という課題を見つけ、それに向かってがんばっています。

そして、幼稚園最高学年である年長さんは、花形であるバトンタッチリレーの、最後の練習を花園グラウンドで行っていました。

運動会に参加するみなさんの目に映るのは、当日の年長児たちの姿です。きっと、素敵な姿を見せてくれることと思いますが、「本番当日」のリレーに至るまでには、子どもたちの、さまざまな思いの積み重ねがありました。

それを知ること、もっと、当日、みなさんに年長リレーを、運動会を楽しんでもらえるんじゃないかな…そんなことを思い、「くろぐみだより」を出させていただきます。

さて、年長さんは、どんな経験をして、今、なにが育ってきているのでしょうか…?

バトンタッチリレー (副園長)

手紙

「かけっこはじぶんが1ばんになりたいたくてがんばってれんしゅうしたよね。でもいまは、くらすのみんなで1ばんになりたいたくてがんばってるんだね。」

かけっこはひとりでこーるまではして行くけど、ばとんたちりれーは、くらすのみんなでひとつのばとんをつないでいかなくちゃいけないから、むずかしいよね。

でも、そんなむずかしいことをがんばっているおおきいぐみさんって、すごいね!!」

各クラスへ、年中時の担任からの手紙より抜粋

1

担任は聞いた。

「みんなでがんばるって…みんなって誰？」

「それは、クラスのみんな」

「じゃ、今はみんなでがんばってる？」

男の子が答える。

「いまはみんなが練習してない」「男しか練習してない」

女の子も言う。

「男の子が見てない所でも練習したし、朝も一回やってきた！」

「一回練習しただけで、強くない!」「女は一回練習しただけで、手紙交換したり折り紙したりしてる、おしゃべりしてる」

「だって、男の子は怒って教えてくれるから、男の子とは練習したくない!」

「真剣じゃないやつにやさしくなんて教えられない」

「・・・」

女の子たち、黙ってしまう。そして、少しの時間が経ち。

「でも、やっぱりやさしく教えてもらいたい!」

「じゃあ、真剣にやったらやさしく教える!

けど、真剣にやってなかったら、怒る!怒って教える!」

「…じゃあ、がんばってみる」

その後、話し合いが終わって、給食の準備をしているところ、一人の女の子が泣く。担任が聞く。「どうしたの?」

「男の子に、あんなに言われて悔しい」

そこにいた、もうひとりの女の子が言う。

「そんなに悔しいんだったら、男の子をびっくりさせようよ!」

そして給食後、女の子たちは練習をし始めた。

男の子たちが声をかける。

「んー…さっきはいまいちだっけど…いまのはけっこう、よかった。

じゃあ…もういっかいやってみよっか!」

つとめて、やさしく。

帰りのとき、担任が聞く。

「どうだった?」

「んー、前よりはやさしいかな。やさしかったからよかった」

2

足の速くない女の子、Aは、あまり練習に来なかった。

「みんなと走るのがいやだ」と言う。

じゃあ、先生と2人で走ろうよ、と誘うと、しぶっていたが、やる、と園庭まで行った。

すると、園庭ですでに同じクラスの男の子たち3人が練習していた。

「お、A、一緒にやろうぜ」と男の子たちが誘う。

だがAは「一緒にやるのはいや」「見られるのはいや」と言う。

男の子たちは言った。

「じゃあ…おれたち、山のほう向いてるわ。栗でも拾ってるから」

そして、Aも走ることができた。また、バス待ちの時間にやろうね、と話した。

それからAも走るようになったが、まだ、他の子と走るのは拒否していた。

男の子が言う。

「なあ、A、速い子と走ったほうが、『おいつくぞ』とか思えるからいいんだよ。速くなるんだぞ」

そして、Aも、少し悩んだが、男の子たちと、4人で走った。

今は、見違えるように、堂々と走っている。

3

走る順番、走順も、重要な作戦だ。年長は、それも子どもたちが話し合っで決める。

9月から、何度も何度も、試行錯誤して、本番の順番を決めるのだ。

ある金曜、赤チームと白チームに分かれて、子どもたちが自分たちで話し合い、走順を決めていた。

そのとき、赤チームのBだけが輪に入らない。

Bは口数が少なく、あまりみんなの前で自分を主張しない子だった。

周りの子が言う。

「Bがきてくれないから決めれないよ!」「決めようよ」
Bが言う。「リレーやらない」
「なんで?」みんなが聞く。担任も声をかける。だがBは理由を言わない。帰りに教えてくれる、と言い、その場は走順を決めずに終わる。だが、その日のうちには、Bは理由を言わなかった。

翌週、走順を決めるためにまた集まって話をする。

言葉数の少ないBに、みんながいろいろと聞く。

「何番が良かったの?」「Cくんが勝手に決めるのがいやだったの?」

Bの思いを予想して、みんなが聞く。でも、Bは首を横に振る。

長い時間がたった。担任が聞く。

「なんでリレーやらないか、みんなの前で言える?」

首を横に振る。

「先生になら言える?」

首を横に振る。

「赤チームの友達になら言える?」

うん、と首を縦に振る。

そしてまた、赤白のチームに分かれて話していると、Bが口を開いた。

「Dがおやますわりしてないから、やだ」

「なんで、Dがおやますわりしてないのがいやなの?」

Bは口を開かない。友達が聞く。

「ふざけてやってほしくないんじゃない?」

「うん」

担任が聞く。

「そっか。そうだったんだね。でも、ふざけてるのはDだけ?」

赤チームの子も、白チームの子も言う。

「いや、他のみんなも!」

「じゃあ、Bくんは、みんながふざけないでできるなら、リレーやりたい?」

「うん」

そして、Bも加えて、赤チームみんなで走順を決める。決めたものを担任に見せに来る。担任がひとりひとり確認をする。Bは浮かない顔をしている。

「今の順番で、納得いかない子、いる?」

Bが、そっと手をあげる。

「Bくん、納得いってないみたいだけど、みんなこの順番でいい?」

「それじゃ、だめだ、考え直す!」

白チームの子たちが言った。

「じゃあ、給食の準備はおれたちにまかせて、赤チームは走順決めなよ!」

もう一度、赤チームは走順を考え直す。

みんなの前で「納得いかない」と意見の言えたBも、すっきりした顔で話し合いに参加している。そして大きな声上がる。

「できたー! 決まったー!!!」

赤チーム、Bも、みんなも、いい顔をしていた。

ああ、こんな顔をするんだ、と担任は思ったそうだ。

給食の支度は白チームが全部やってくれた。お茶まで用意してくれた。

赤チームが言った。「ありがとう!」

4

本当にギリギリで競っていた勝負で、バトンを落としてしまったE。

ふざけていたわけでもなく、真剣にやった結果、落としてしまった。

チームは負け、FがEを強く責める。

「おまえがバトンを落としたから負けたんだぞ!!!」

Fは、友達にそんな言い方をしたことがない。それだけ本気だった。

クラスに戻り、担任がEに声をかける。

「バトン落としちゃったけど、Eも本気だったんだよね。だから大丈夫だよ、先生はわかってるよ」

すると、堰を切ったようにEが号泣しはじめる。

Eの次に走るGが、声をかけにくる。

「大丈夫だって! もし本番で落としたって、おれがぬかしてやるから!」
周りの子も言う。

「真剣になるとそういうことだってあるんだよ!」

みんなが集まってきて、言う。「大丈夫!」「大丈夫だよ!」

5

いっぱい練習して、勝負して、その結果、わかってきたことから、いろんな作戦を考えた。

手の振り方、白い線の近くを走ること、顔と目はどこを向くか、挙げればきりがなく、いろいろな作戦が各クラスから生まれた。

そして、次の作戦、つまり課題を、みんなで話して考えた。

自分たちにできていないこと…

「じゃあ、バトンの渡し方を練習しようか?」

ということになった。

「バトンを練習するのがいいと思う子〜?」先生が聞く。

Hは、ひとりだけ手をあげなかった。

周りの子が、説得し始めた。勢いよく、半ば強引に。

Hは、そうやってたくさんの子に囲まれるようにいろいろ言われるのが、苦手だ。そのうち、Hは体を動かし暴れ始める。周囲の子に、蹴った足が当たる。

そのうち、周りの子も怒り始める。

「じゃあもう、おまえなんかやらなくていいわ!」

「やりたくないなら出てけ!」

本当に、Hはクラスのドアから廊下に押し出される。

すると、今度はHも意地になり、逆にドアを押さえつけ、追ってこようとするものを拒否する。

混沌とした状況に、担任が口を開く。

「今、みんなはHくんに『出てけ』って言ったけど、思い出してみて。Hくんは、今までがんばってなかったかな?」

少しの時間の後、Hを追い出したひとりであるI…、Iは、お互い主張が強いので、Hとはウマが合わないことが多い。そのIが言う。

「がんばってた。走るのもだし、話し合いのときなんか、いつもピンピンに手をあげて、意見を言ってた。がんばってた」

「そうだね、先生もそう思うよ。でも、今みんなは、そんながんばってた仲間を、『出てけ』って追い出したんだよ。みんなは、追い出したこと、どう思う?」

「…やってはいけなかったと思う」

「うん、先生も、悲しかったよ。じゃあ、どうする?」

「…追い出したこと、ごめんね、って言う」

Hが押さえつけて開かないようにしていたドアを、強引に開く。そして、みんなが謝りに行こうとする。しかし、意地になったHは、走って逃げる。廊下を走り、職員室の前を走り、逃げる。みんなは、そんなHを走って追い、その体を押さえつける。Hはまた体を暴れさせる。

担任は、少し時間がいると判断し、Hにはひとりの時間を、そして他のみんなには、「Hに、なんて言ったらいいか考えて」と伝える。「先生はHくんの様子を見に行くから、先生いないけど、Hくんが戻ってきたときにどうしたらいいか考えて」と。

そして担任は、Hがひとり去っていった園庭に行く。

ゆっくり、Hに話す。

「ねえ、Hくん、みんながHくんにああやって言ったのは、どうしてだと思っ?」

みんな、嫌いで言ったんじゃないよ。

みんなは今、お部屋でどうしたらいいか考えてるから、Hくんもどうしたらいいか考えてみて。

Iくんも、みんなも、『Hくんはがんばってきた』って言ってたよ」

Hは、指で砂に自分の名前を書いたりしながら担任の話を聞いている。

「ねえ、Hくん、もしみんなに伝えたいことがあるなら、みんなの前で言える?それとも、言えない?」

Hは、砂に字を書いている。
「じゃあ、Hくん、もし言えないんだったら、Hくんは字が書けるから、字で書いて伝える？」

Hが口を開く。
『ご』、ってどうやって書く？
こうだよ、と先生が教える。
「じゃあ、『め』ってどうやって書くの？」

砂に並んだ「ご」「め」の文字。

「ねえ、Hくん、砂に書くと消えちゃうから、先生、紙持ってるから、これに書く？」

Hが紙に書く。3文字目からは、自分で書ける字だった。

『ごめんね』

「Hくん、その『ごめんね』って、どの『ごめんね』？
蹴ったこと？それとも、バトンの練習をやらないって言ったこと？」

「両方」

「Hくん、その紙を持って、みんなのところに行けそう？」

「…うーん…」

「じゃあ先生がその手紙を、みんなのところへ届けるね」

先生がクラスに戻る。途中、クラスから叫び声が聞こえる。
「わたし(先生)もいなかったんじゃ、めちゃくちゃになってるかな…？」

クラスの中は、号泣の嵐だった。

「どうしたの？」先生が聞く。

「リレーがやりたい！」

「みんなでやりたい！」

「みんな、そんなに泣けるくらい、そう思えるんだね…」

Hくんから、手紙預かってきたよ

みんなが手紙を見る。『ごめんね』

Hも、気になったようで、クラスに戻ってくる。号泣しているみんなを見て、少し驚いているようだった。

みんなが、泣きながらも、口々にHに言う。

「さっきはあんなふうに言ってごめんね」

「一緒にリレーやろうよう」

「バトン練習しようよ！」

みんなで。

認め合ってるから。

みんなで、やるんだ。

6

子どもたちにとって、アンカーは、「他のどの順番も大切である」という考えの上になっても、やはり、最も重要なポジションだった。

Jはアンカーがやりたかった。Kもアンカーがやりたかった。
ふたりともがんばっていた。リレーに向かって一生懸命だった。

それまで足の速いJがアンカーをやっていた。

Kは、「ぼくもアンカーがやりたい」と言い出せなかった。自信がなかったから、みんなの話し合いの中で、自分の意見を言うことができなかった。そして、どうせJがやるんだろ、という思いもあった。

でも、Kはがんばっていたし、速くなっていたし、話を聞くときもいつも真剣だった。

そして最終決定の、一つ前の走順を決める日。きわめて最終決定に近い日。

リレーをやる上で大事なことは何か、というのを、担任が確認する。

その上で、走順を決めていく。そして、聞く。

「アンカーはどうする？どういう子にアンカーを任せたい？」

子どもたちは答える。

「真剣な子！」

「何を真剣にやってる子なの？」

「真剣にやって足が速い子」「リレーの入場から退場まで真剣な子」「リレーの後の話も聞ける子」

「じゃあ、どの子がそういう真剣な子だと思う？」

「Kがいいと思う！」「Lもいいと思う！」「Jもいいと思う！」

そこで、女の子が発言する。

「Jは、入場のときも、お話を聞くときも、いつもふざけてる！真剣じゃない！」

「どうやってふざけてるの？」

「おしゃべりしたり、脚で砂を触ったりしてる」「真剣じゃない」

男の子も言う。「今はJには任せれない」「そう思う」

ずっとアンカーだったJの目は、充血し、涙をこらえている。

「じゃあ、みんなはKとLのどっちがアンカーがいいと思う？」

みんな、真剣さは互角だと言う。足の速さは、意見が分かれる。そして、なら花園グラウンドで直線勝負をして、決めれば良い、ということなる。

白い線から、みんなの待つ、遠いフェンス近くの白い線まで。

ふたりきり、構えて、笛を待つ。Lが、Kに言った。

「なあ、なんかドキドキするな」

「なあ、ドキドキする」

なんと、勝負は同着で、引き分ける。その場では、速さも引き分けなら、運のいい方でいい、ということで、じゃんけんをして、Kが勝つ。アンカーは、Kに、決定した。

次の日。担任は言う。

「昨日は、運がいい方、ってKくんになったけど、でも、運なんてそのときそのときで変わっちゃうよね。だから、次に本番の走順を決めるときは、みんなが言った真剣さでもう一回決めたいと思うけど、みんなはどう思う？」

みんな、同意した。

話し合いが終わった後、担任がJに声をかける。

「Jくんはどう？」

「ぼくは、たしかに砂をさわってたから…」

「Jくんは、今は何番がやりたい？」

「ぼくは、14番(※アンカーの前)かな」

「なんで？今までアンカーがよかったのに、なんで14番になったの？」

「アンカーは、転んだり、バトンを落としたりしたら終わりだから、ドキドキする…」

Jは、少し弱気になっていた。

「Jくんは、知ってることをみんなに教えてくれるし、教えるのも一生懸命だし、足も速いと思うよ。みんなは、Jくんに何が足りないって言ってた？」

「真剣さ」

「そこだけだよ。先生は、あと6日あるから、Jくんが真剣さを見せられるところはあると思うよ。がんばれば、できると思うよ。だから、もういっかいおうちで考えてきてね」

そして土日をはさみ、週明け、担任はJに聞いた。

「Jくんは、何番がいいと思った？」

「うん、ぼくは、やっぱりアンカーがやりたい」

それから、Jはもっともっと、真剣になった。

最終決定の日まで、Jは必死にがんばった。リレーだけじゃなく、それ以外の生活のあらゆる面までも(給食の支度でも、おもちゃの片づけでも、担任のお手伝いでも)、がんばった。

そして、「本番の走順」を決める日。

みんなが集まって座った。

Jは緊張のあまりか、今にも泣きそうな目だった。

担任は、全員に「何番かやりたい？」と希望の走順を尋ねる。だが、まず一番に、みんなの前で自分から「アンカーやりたい」と言ったことのないKに聞いた。Kは、今まで自信がなかった。自分から言えなかった。そんなKに、「まわりからの流れ」でアンカーを希望させたくなかった。自分の意思で言ってほしかった。だから最初にKに聞いた。

「Kくんは、何番かやりたい？」

Kは、初めて、みんなの前で、言った。

「アンカーがやりたい」

Kは、壁をひとつ、越えた。

みんなも、KならOK、と言った。

Lもアンカーを希望した。みんなもOKを出す。

そして、Jも、アンカーを希望した。

担任はみんなに聞いた。

「Jくんはどう？」

男の子が言う。

「うーん、Jはまだちょっと…」

Jの目は真っ赤だ。泣くのをこらえている目だ。

そこで、女の子が、口を開く。

「でもJくん、今日も、こないだもがんばってたよ」

「わたしは後ろのほうだから、入場や退場のときも、後ろから見ててわかったよ、真剣にがんばってるってこと」

Jの目から涙がこぼれ落ちる。

「今だったら、Jに任せられる」

「じゃあ、J、K、L、3人の中からどうやってアンカーを決める？」

子どもの発想は面白いと思う。話し合いの結果、子どもからの発想で、「真剣さ」を6つの項目（入場・話を聞く・リレー等）に分け、6つの項目別にみんなで投票をし、より多くの項目で一位だったひとがアンカーをやればいい、ということになる。

「3人も、その決め方でいい？」うなずく3人。

「じゃあ、いまから3人の姿を思い出す時間にするから、みんな目をつぶって思い出してね」

30秒ほどたって、そしてそのまま投票を始める。

結果、アンカーはJになった。Jは、みんなに再び、認められたのだ。

KとLは、それはもう、悔しかっただろう。そういう顔だった。

でも、結果はこれでいいと言う。みんなで決めたことだから。

その他の順番も決めていく。

「大事な13番と14番を決めるよ。13番はどうする？」

Jが発言した。

「Kは、予行練習のとき、他のクラスを2人抜かしたよ」

クラスの他の仲間も言う。

「それはKにしかりできなかったよ」「Kの前の11番と12番が（あまり速くない）女の子だけど、もし、3位でバトンが回ってきても、Kなら、いっきに2人抜かして1位になれると思う！」

Kは、クラスの仲間に、じゅうぶん理解され、認められていたのだ。

Kの表情が、変わる。

「Kくん、みんなはそういってるけど、どうする？」

「…13番、やる」

「14番は？」担任が聞く。子どもたちが答える。

「Lは今まで一回も抜かれたことがない」「そうだ、Lなら、Kが一位でバトンを持ってきたら、そのまま一位でバトンをJに渡せる」

そして、最終走順が決まった。

その後、給食の時間、Kが手を洗っていると、横にJが並び、手を洗いながら、言った。

「K、ありがとな。おれ、がんばるわ」

Kは、うん、うんと、無言でうなづく

担任はその日、Kの母にその話をし、そして、「でも、心の中ではアンカーがいい、って気持ちがあるかもしれません」と伝えた。

Kのお母さんは、車の中で、後部座席のKに聞いたそうだ。

「Kは13番になったんだってね。今はどんな気持ちなの？」

Kは答えた。

「おれのまえ2人が女だから、もし3位でバトンが回ってきても、おれが抜かして、1位になる」

きっと、「Jがアンカーになったよ」「本当はアンカーがやりたかった」そんな答えが返ってくると思っていたお母さんは、返事に詰まったそうだ。

「Kは、強く、大きくなったね」、としか言えなかったそうだ。

Kは、現実を受けとめ、そして、友達と、「みんな」で、一位を目指して、リレーをやっている。

決して、「自分」だけ、なんかじゃない。

いくつもの壁を越える。痛みとともに。

そしてその先に、喜びがある。

それが、成長。それが、育ち。

運動会へ

自分の思いを感じた。友達の違いを感じた。

思いを重ねてここまで来た。

「なにができるようになったのか」だけを問うのなら。

「どこまで速くなったのか」だけを問うのなら。

あのクラスは、あのときの学年は、10年前は、ヨコミネ式幼稚園の子は、あらゆる「比較」が可能だろう。

ぼくは、あらゆる、この子たちと比較可能なものたちに言おう。

大事なことはそんなんじゃない、と。

本番、目に見える子どもたちの姿が、どのようにうつるのかはわからない。

まだまだ、「成長過程」の子どもたち。

でも、はっきり言えることがある。

たくさん経験をした。感じた。考えた。練習した。話し合った。

目に見えにくいその胸に、ぎゅっとつまった、「思い」。

それぞれ個性がある。発達の質だって違う。生まれ月も違う。

走ることの技術じゃない。結果としての順位じゃない。

「自分は、とっつてもがんばったんだ！」

自分で、胸を張れること。

「“みんな”でやるって、楽しい！きもちいい！」

自分ひとりが認められるよりも、もっと強く大きな、嬉しさがあること。

自分が好きだ。

みんなが好きだ。

ともにあることが好きだ。

生きている、ということが、好きだ。

いちばん大切なこと、その萌芽を、その小さな胸の、奥に。

あさひこ幼稚園 2013 年長 教育課程 (抜粋)

第14期 8月28日～10月5日 27日 (6週)

・発達の姿

自分のイメージをはっきり持ちながら、友だちの意見も受け止めて遊び、自分の課題に一つ一つ取り組み、達成感を積み重ねていく時期

・ねらい

- ①クラスや園の環境に目が向き、自分がどうしたらよいか考えて行動しようとする。
- ②自己発揮しながらも、友だちの思いを理解しようとし、目的を共にして活動しようとする。
- ③自分のイメージをしっかり持って、目的に向かって素材や表現方法を工夫して遊べるようになる。

・内容

- ①集団生活のために時間を守って、活動に区切りをつけて、始めたり、終わったりする。
- ②自分たちのクラスの生活の実情を考えて、お手伝い活動を取捨選択していく。
- ③運動会関連、動物の飼育、園庭の片付けなど全園的な活動や生活に関する役割を担う。
- ④グループやクラスの活動のなかで、話し合いに参加して自分の意見を発言したり、自分の役割を果たしたりする。
- ⑤遊びやクラスの活動のために必要なルールや約束をみんなで作っていく。
- ⑥自分の遊びのイメージを広げたり、深めたりするために、いろいろな素材、材料、用具、技法を工夫して遊ぶ。
- ⑦チーム意識や、競争意識を持って、全力を出して集団遊びに取り組む。
- ⑧夏から秋へと移り変わる自然に気づき、遊んだり、生活したりする。